

2025年度 須磨学園夙川中学校入学試験

国 語

第 1 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、受験番号シールを貼り、受験番号と名前を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 字数制限のある問題については、記号、句読点も1字と数えること。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

※ 設問の都合上、本文を一部変更している場合があります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもの体験格差を考えるうえで、保護者の収入や居住地などの観的な情報だけでなく、親子の間の関係性や働きかけについても想像し、考えをめぐらせることが重要になる。そこで、今回の調査では、親自身がまだ子どもだった頃の「体験」のあり方についても質問の項目を設けることにした。

B 体的には、自身が小学生だった頃にスポーツ系や文化系など定期的に通う習い事をしてきたかどうか、そして自然体験や文化的体験などの機会が年に1回以上あったかどうかを聞いた。

その結果、親自身が小学生時代に「体験ゼロ」であった割合は19.3%だった。逆に、保護者の80.7%はかつて何らかの「体験」をしていたことになる（なお、子どもについては「昨年1年間」の体験を聞いているので、親と子の数値をドウレツに比較することはできない）。

この割合を確認したうえで、自身が小学生時代に「体験ゼロ」の保護者とそれ以外の保護者とで、その子どもの「体験」のあり方についての違いがあるかを分析した。

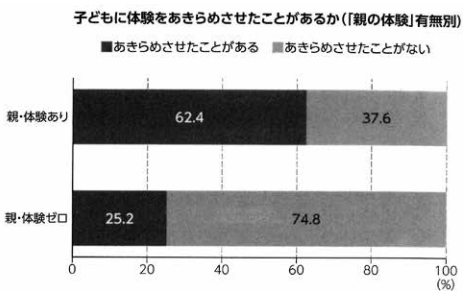
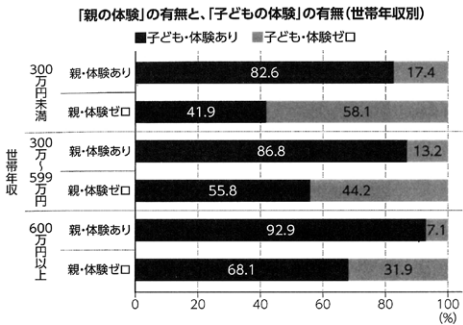
I、親自身が「体験ゼロ」の場合は子どもも「体験ゼロ」である割合が5割を超える（50.4%）のに対し、親が何らかの体験をしていた場合は子どもの「体験ゼロ」が1割強（13.4%）にとどまることがわかった。非常に大きな違いだ。これは何を意味するのだろうか。

ここまで見てきた様々な調査結果を振り返れば、親の収入が子どもの様々な「体験」の機会と強く関係していることは明らかだ。ならば、自身も子ども時代に何らかの「体験」をしていた親たちは、現在収入が多い層と大きく重なっているだけかもしれない。そんなカセツも立てられるだろう。

II、「親の体験」の有無と「子どもの体験」の有無との関係を、現在の世帯年収ごとに集計してみると、どの年収区分においても、「親の体験」ゼロの場合は「子どもの体験」もゼロになる割合が高いことがわかった。

つまり、新しい年収の親たち同士を比べたときにも、「親の体験」の有無によって「子どもの体験」のあり方に大きな違いが出ている。言い換えれば、たとえ現在の年収が低くとも、親自身が子ども時代に何らかの「体験」をしている場合には、その子どもは一つ以上の「体験」に参加している割合が高くなっている（つまり、「体験ゼロ」の割合が低くなっている）。

III、世帯年収300万円未満の家庭を見ると、親の子ども時代の「体験」の有無によって、子どもの「体験ゼロ」の割合には**X**%と**Y**%という形で大きな違いが出ている。そして、ほかの年収区分においても、これと同じ顕著な傾向を見とることができた（グラフA）。



親による子どもの「体験」の捉え方やそれへの意向を理解するうえで、調査の別の項目も参考になった。それは、「子どもがやってみたいと思う体験をあきらめさせたことがあるか」を聞いた設問だ。

この質問に対する親からの回答を、親自身の小学生時代の「体験」の有無と掛け合わせたところ、

I

前者が62.4%であるのに対し、後者では25.2%にとどまる（グラフB）。

ちなみに、同じ「あきらめさせた経験」への回答を世帯年収と掛け合わせたところ、あきらめさせたことのある割合は、「300万円未満」で49.1%、「300万円～599万円」で54.9%、「600万円以上」で58.9%となり、経済的な壁のより高い低所得家庭で「あきらめさせた経験」がより多く見られたわけではなかった。

ここから示唆されるのは、親自身が子ども時代に何らかの「体験」をしてきたこと自体が、自分が親になったあとに我が子に対して価値のある「体験」をさせてあげたいという気持ちや欲求を持つことのドライとなっているのではないか、そして子どもに対してその「体験」を「させてあげたい」という気持ちをより強く持つからこそ、経済的な事情など様々な理由で「させてあげられなかった」と感じる状況もより生まれやすくなっているのではないか、ということだ。

つまり、親自身がピアノにせよサッカーにせよ水泳にせよ登山にせよ、それらの「体験」に一定の価値を感じていなければ、子どもにそれを「あきらめさせた」という思いになりづらく、同時に親自身がその「体験」に価値を感じる背景として、自分自身の子ども時代の「体験」があるのではないか。

実際に、子どもにキャンプなどをさせたことがないという親から話を聞くと、自分自身も子ども時代にそうした自然体験をした思い出がないという。そして、もし今お金や時間に余裕ができたとしても、そのお金と時間はきつとキャンプとは別のことに使うと思うと語っていた。視野をさらに広げれば、かつて親自身が子ども時代にもどんな「体験」をしていたかに対しても、その親（＝祖父母）の子ども時代の「体験」のあり方が関係していたと考えるほうが自然だろう。

どうやら体験格差という問題は、同世代の子どもたちの間にある格差として捉えるのみでは十分ではなさそうだ。世代を超えて格差が連鎖すること、世代を超えて格差が固定化している可能性まで含めて、この問題を見ていく必要がある。

ある子どもが何らかの「体験」に興味を持たない、やりたいとも感じない状態には、個人的な趣味や好み以上の背景がある。

そうであればこそ、社会全体で子どもの体験格差の解消を考えるのなら、「やってみたいのにできない」子どもたちだけでなく、「何に興味があるのかがまだ見つかっていない」子どもたちにまで目を向けるべきだ。

そして、何か一つの「体験」を無理やり押し付けるのではなく、色々な「体験」に触れられる機会を用意し、その中から好きだと思える「体験」を見つめるサポートをしていくべきだろう。

（今井悠介『体験格差』講談社現代新書）

一 設問

問一 空欄 A、B に入る漢字を次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 主
- 2 客
- 3 直
- 4 実
- 5 具

問二 空欄 X、Y に入る数値をそれぞれ答えなさい。

ただし、X には「体験あり」の数値、Y には「体験ゼロ」の数値が入ります。また、数値の表記は本文になり、小数第一位まで記入すること。

問三 空欄 I、II に入る語句を次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。ただし、同じ番号を二度選んではいけません。

- 1 例えば
- 2 すると
- 3 つまり
- 4 しかし
- 5 ところで

問四 ——線部ア「何らかの『体験』とありますが、その具体

例として適当でないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 小学校二年生の頃に叔父さんで行った魚釣り。
- 2 小学校三年生の頃に親に始めさせられたピアノ教室。
- 3 小学校四年生の頃に親に頼んで始めたバレエ教室。
- 4 小学校五年生の頃に家族で行ったコンサート。
- 5 小学校六年生の時に修学旅行で体験したうどん作り。

問五 空欄 イ に入る文として最も適当なものをグラフ B と本文を参考にして次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子ども時代に「体験」をしていた親のほうが、子ども時代に「体験ゼロ」だった親よりも、自分の子どもがやってみたくて思う「体験」をあきらめさせたことのある割合がかなり低くなった。
- 2 子ども時代に「体験ゼロ」だった親のほうが、子ども時代に「体験」をしていた親よりも、自分の子どもがやってみたくて思う「体験」をあきらめさせたことのある割合がかなり高くなった。
- 3 子ども時代に「体験ゼロ」だった親のほうが、子ども時代に「体験」をしていた親よりも、自分の子どもがやってみたくて思う「体験」をあきらめさせたことのある割合がかなり低くなった。
- 4 子ども時代に「体験」をしていた親のほうが、子ども時代に「体験ゼロ」だった親よりも、自分の子どもがやってみたくて思う「体験」をあきらめさせたことのある割合がかなり高くなった。

問六 ——線部ウ「させてあげられなかった」と感じる状況も

より生まれやすくなっている」とありますが、そのように筆者が考える理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 親の子ども時代の経験の量が、自身が親になった後の考え方に影響を与えるが、経済的事情で子どもに経験をさせられないことに、親はいらだちを感じるようになるから。
- 2 親の子ども時代の経験の有無が、自身が親になった時の考え方に影響を及ぼし、子どもに経験を積ませられない場合に、親はそのことに対して罪悪感を覚えるようになるから。
- 3 親の子ども時代の経験の質が、自身が親になった時の考え方に影響を与えるため、子どもに経験をさせられない場合に、親はそのことを申し訳なく感じるようになるから。
- 4 親の子ども時代の経験の有無は、自身が親になった後の考え方に影響を及ぼすため、子どもの経験があまりにも少ないと、親はそのことに対して焦る気持ちが強くなっていくから。
- 5 親の子ども時代の経験の量が、自身が親になった後の考え方に影響を及ぼすが、子どもの経験にも価値がないと無意味であるため、親はより良い経験を期待するようになるから。

問七 ——線部エ「世代を超えて格差が固定化している」とあり

ますが、このことと意味の近い慣用句として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 豚に真珠
- 2 とんびが鷹を生む
- 3 蛙の子は蛙
- 4 河童の川流れ
- 5 虎の威を借る狐

問八 ——線部オ「好きだと思える『体験』を見つけるサポート

をしていくべきだろう」とありますが、それはなぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問九 〰〰〰線部 a、b、c、d の漢字の読みをひらがなで、カタカナを漢字で書きなさい。

二 次の文章は台湾の現代作家による、1980年代の台湾を舞台とした小説である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

注1 祝賀会が終わったあと、クラスの男子はさっきのことが理由で、残らずぼくを①置いてけ〇〇にして帰った。しようがないので、ひとりでバス停を探した。すると、ぼくが乗ったバスは松山行きだった。車庫に着くと、運転手は終点だと言って、乗客を全員下ろした。ぼくは訊いた。「商場には行かないんですか」

運転手は言った。「ああ、君、逆方向に乗ったんだな。向かいから乗りなさい。十分過ぎたら次のバスが来るから。でも四十分はかかるぞ」一見こわもての運転手は、実はとても親切で、ぼくに小銭を貸し、公衆電話から家に電話をかけた。バスを待っているあいだ、ぼくは、この世界がひどくよそよそしいものを感じていた。まるでテントウムシの星の上に捨てられたようで、涙が止まらなかった。家に帰ったら、叔母の夫にきつく殴られた。彼からしたら、ぼくはただの厄介者なのだ。

小さいころから、両親がどこへ行ってしまったか、ずっと知らされていなかった。ぼくは叔母とその夫に育てられた。ふたりはいつも、ぼくにこう言い聞かせた。「お前の両親は病気で死んだ。だからわたしたちが養ってるんだ」でも、両親の写真すらないのだ。あのころは貧乏でカメラはおろか、写真館へ行く金もなかった、と叔母は説明した。叔母夫婦には四人の子供がいた。一番年上のフェンは、ぼくと同年代で、また唯一の話し相手だった。ほかの子供たちは、ぼくに敵意を抱いていた。叔母の夫は、商場で小さなワンタン麵屋を開いていたので、ぼくは子供のころからワンタンを包むことができた。一秒で一個は当たり前。フェンと同じくらい早かった。

あの事件が、ぼくとテレサの関係を特別なものにした。それ以来、テレサは放課後、廊下でぼくに笑顔を見せてくれるようになった。あれはとても神秘的な微笑みだった。まるで誰かから②ふ〇〇なにかを渡されて、しっかり持ってるよ、と言われていた。付き合っていると噂していた。もともとぼくらは、「付き合ってる」なんて言わなかった。ただ、「怪しい」と言うだけだった。半年が過ぎて、ぼくらが「のび太」とあだ名をつけた、その金持ちでメガネの同級生は、家族とともにアメリカへ移住した。テレサはひどく落ち込んでいた。アメリカに行った最初の月、のび太からクラスのみんなに手紙が届いた。先生はひとりの生徒を黒板前に立たせて、手紙を読ませた。そいつが朗読コンクールみたいだに読んだものだから、③や〇〇とおかしかった。手紙にはこんな文があった。

大好きなみんなへ。アメリカでの生活はとっても素敵です。今はいとこの家に住んでいます。床には毛の長い絨毯が敷かれています…

ところがその生徒は読み間違えて、「毛の長い絨毯」を「毛の生えた絨毯」と読んでしまい、クラス全員が④お〇〇を抱えて笑った。ぼくは横目でテレサのほうを見た。彼女は表情もなくそこに座っていて、手紙の内容は全然聞いてないみたいだった。

卒業式の日みんな泣いた。なぜかという、担任の先生が、今日泣かない人は心がない人だと言ったからだ。何年かして思い出してみても、そのとき自分が本当に悲しかったかどうか、ぼくは確信

が持てなかった。だから自分には心があるのか、ないのか、ずっとわからないままだ。中学に上がる前の夏休み、ぼくは毎日テレサに手紙を書いた。一日でも書かなかつたら、自分の悲しみが途切れてしまうと思ったからだ。

ぼくらは長いあいだ手紙をやりとりした。最初は手紙だけだったが、しばらくして、ぼくはテレサの通う中学へ行って、彼女の授業が終わるのを待つようになった。そしてバス停まで送っていく。それからときどき彼女とバスに乗り、いっしょに帰るようになった。叔母とその夫の締め付けは、そのころだいぶゆるくなっていたので、ぼくはできるだけ遅く帰って、彼らの厄介を少しでも軽減することにした。本当のところ、ぼくは叔母夫婦を恨んではいない。大人になってから考えれば、あんな貧しい境遇で、我が子でない子をひとり余分に育てるといえるのは、よほどの我慢が必要だったはずだ。

ただぼくは、自分の両親のことを教えてくれないことが許せなかっただけだ。

(作 呉明益 訳 天野健太郎「金魚」／『歩道橋の魔術師』河出文庫より)

注1 祝賀会 …… 国慶節 (建国記念日) を祝う祝典に「ぼく」たちは参加していた。

注2 さっきのこと …… 本文の少し前に、困っている「テレサ」を「ぼく」が助けるという出来事があった。「テレサ」は男子生徒たちにとってのあこがれの存在だった。

注3 松山 …… 台北市東北部の地名。

注4 商場 …… 多種多様な店が一所に集まった商業施設。市場。

注5 中学に上がる前の夏休み …… 台湾では新学年は九月に始まる。

注6 境遇 …… その人の置かれている状態や身の上のこと。

二の設問

問一 空欄①④の〇〇には、次のひらがなを組み合わせてできる二字の表現が入ります。それぞれについて適当な表現を作成し答えなさい。ただし、同じひらがなを二度用いてはいけません。

「い・か・た・な・に・ぼ・ら・り」

問二 ——線部ア「まるでテントウムシの星の上に捨てられたよう」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを説明した語句として適当でないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 心細さ
- 2 さびしさ
- 3 孤独こどく
- 4 絶望
- 5 不安

問三 ——線部イ「ぼくはただの厄介者なのだ」とありますが、ここでの「厄介者」の意味はどのようなものですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 手間のかかる子供
- 2 やんちゃな子供
- 3 ひねくれた子供
- 4 真意のつかめない子供
- 5 しつけにくい子供

問四 ——線部ウ「ぼくは子供のころからワントンを包むことができた。一秒で一個は当たり前。」とありますが、どのようなことを言ったものですか。次の空欄に合う表現を十字以内で考えて答えなさい。

義父がワントン麵屋を営んでおり、ため、「ぼく」はワントン作りに熟練するようになったということ。

問五 ——線部エ「ぼくらが「のび太」とあだ名をつけた」とありますが、この表現が成り立つ社会的背景について説明した次の空欄に入る五字の語句を考え、すべてひらがなで答えなさい。

当時の台湾でも、は広く知られていた。

問六 ——線部オ「担任の先生が、今日泣かない人は心がない人だと言った」とありますが、「担任の先生」のことばを「ぼく」はどのような趣旨しゅしに受け取ったのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 卒業式の日、六年間お世話になった先生への感謝の思いがこみ上げてくるのは、人として当然のことであり、その敬意から涙を流さない生徒などいるはずがないという趣旨。
- 2 卒業式の日、育ててくれた保護者に六年間の感謝の思いを持つことが、人として必要なことであり、愛情に対して涙を流すことに実の親か否かの違いはないはずだという趣旨。
- 3 卒業式の日、六年間頑張った自分自身に対しても感謝の念を持つことが、人として必要なことであり、これから一人で生きる責任感をかみしめて涙するべきであるという趣旨。
- 4 卒業式の日、自分を育んだ地域や国への感謝の思いに気づくのが、人として当然のことであり、今まで気づかずいた後悔かへに涙を流さない生徒がいてはいけないという趣旨。
- 5 卒業式の日、共に過ごした級友への感謝の思いで胸がいっぱいになるのは、人として自然なことであり、その人達との別れのつらさに涙を流すのが普通ふつうの人間だという趣旨。

問七 ——線部カ「自分の悲しみ」とありますが、これはどのような「悲しみ」のことですか。なぜ悲しいのかの理由を明らかにして、二十字以内で説明しなさい。

問八 ——線部キ「自分の両親のことを教えてくれない」とありますが、これはどのようなことですか。次の空欄に合う表現を十字以内で考えて答えなさい。

「ぼく」の実の両親は、きっとと思うのに、そのことについて何も話してくれないということ。

↓ここにシールを貼ってください↓

--

受験番号

名前	
----	--

2025年度 須磨学園夙川中学校 第1回入学試験 解答用紙 国語

	※						※	※	※	※	※	※	※	※	※
問九	問八						問七	問六	問五	問四	問三		問二	問一	
c	a										III	I	X	A	
d	b														
											II	Y	B		
		70	60	40	20										

（※の欄には、何も記入してはいけません）

一

	※
--	---

	※		※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
問八	問七		問六	問五	問四	問三	問二	問一				
								③	①			
								④	②			
10	20											

（※の欄には、何も記入してはいけません）

二

	※
--	---

	※
--	---

